

Title	日本語を第2言語とする日本語教師 : スリランカの3人の教師のケース・スタディー
Author(s)	Arambegoda, Lokugamage Samanthika Kumari
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49382
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	アラベゴダ ARAMBEGODA	ロクガマゲ LOKUGAMAGE	サマンチカ SAMANTHIKA	クマーリ KUMARI
博士の専攻分野の名称	博士(文学)			
学位記番号	第 22619 号			
学位授与年月日	平成21年3月24日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻			
学位論文名	日本語を第2言語とする日本語教師—スリランカの3人の教師のケース・スタディー—			
論文審査委員	(主査) 教授 青木 直子 (副査) 教授 工藤真由美 准教授 石井 正彦			

論文内容の要旨

本論文は、申請者自身の経験から出発した問題意識に基づき、スリランカの日本語教育において、non-native speakerであるスリランカ人の教師がどのような教育実践を行い、native speakerである日本人教師とどのような関係を作っているかを明らかにすることを目的としたものである。

本論文は10章から構成される。A4判196ページ、400字詰め原稿用紙にして約700枚の分量である。

第1章の背景と研究目的では、まずスリランカの日本語教育と日本語教師の仕事について述べ、続いて本研究の出発点である日本語教師としての申請者の経験を語り、本研究の目的を明らかにしている。

第2章では主に英語教育における研究の流れを踏まえ、まず native speaker という概念に関する議論の問題点を指摘し、それに関連して第二言語教育において non-native 教師に関して行われている研究を検討している。次に第2言語教育で到達目標とすべきなのは native speaker ではなく、有能な L2 ユーザーであるという主張と L2 ユーザーという概念そのものを紹介する。そして第2言語の授業における第1言語の使用についての研究をまとめるとともに、第2言語教育における native speaker 至上主義とも呼べる考え方と社会(国家)間に存在する文化的偏見の関連を検討している。最後にスリランカの日本語教

育に関する研究をまとめ、本研究の意義を論じている。

第3章では本研究の方法論である質的ケース・スタディーを紹介し、本研究の方法論として選んだ理由を述べる。さらに本研究のケースを選択するにあたって考慮に入れたこととケースを選ぶ際に利用したサンプリングの方法を述べる。

第4章では調査の協力者と彼らが働く日本語教育センターを選ぶ際に考慮に入れたことを具体的に述べ、調査の依頼及びデータ収集を含む調査概要を述べる。

第5章では本研究のデータ分析の方法について述べ、この分析の中に申請者の解釈がどのように影響しているかを示す。

第6章、第7章及び第8章はそれぞれ一人の協力者に焦点を当てたケース内分析である。各章では、一人の教師と彼/彼女が日本語を教えている日本語教育センターについて詳しく述べ、参与観察によるフィールドノートと録音データをもとに授業の一部を再現して紹介するとともに、フィールドノートとインタビューの録音データに基づいて、当該教師の授業実践や同僚との関係、日本語の使用に関する考え方を記述している。

第9章では3人の協力者それぞれのケース内分析に共通するトピックとして、授業における媒介語の使用、日本人教師との関わり方、L2 ユーザーのアイデンティティという3つを取り出し、ケース間分析を行っている。

第10章では本研究を通して得られた理解をまとめ、それに基づいて、教育機関、スリランカ人教師、日本人教師それぞれに対する提言を行っている。またスリランカの日本語教育が必要とする教師養成への提言も行っている。最後に今後の課題として残されたことは何かについて述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、スリランカにおけるフィールドワークで収集したデータをもとに、3人の教師の教育実践を厚い記述によってビビッドに描きだすとともに、これらの教師の教育実践の背後にある思考、native speaker である日本人教師に関する認識を彼ら自身の言葉で報告している。従来、発展途上国の日本語教育に関する研究/報告は、現地に滞在する日本人教師の視点から書かれたものがほとんどであり、現地の non-native 教師の声を反映したものは極めて少なかった。その意味で本論文には他にない独自性があると言える。また、本論文は、non-native 教師の実践の背後には現地の事情を考慮した合理的な理由があること、non-native 教師は現地の文化や言語の知識を生かした教育実践をしていること、日本人教師からは「問題」であると見られがちな彼らの実践を支えるのは教育機関の日本側に対する「言うべきことは言う」という態度であったり、教師自身の L2 ユーザーとしての自信であったり、文化的偏見をもった日本人への対処法であったりすること、これらの条件がない場合、non-native 教師は native speaker 至上主義の犠牲になる可能性があることを明らかにした。これらの知見は海外において日本語教育に携わる日本人教師や、海外

に日本人教師を派遣する団体に従来の慣行、方針、教育実践の再検討を迫るものであり、学問的にも社会的にも意義が大きい。

本論文に欠点がないわけではない。先行研究のまとめと本論文の理論的枠組みに関する議論には改善の余地がある。ケース間分析も、データの分析をもう少し緻密に行えば、まだ他にも新たな知見を導き出すことができたように思える。しかし、日本語教育が世界的広がりを見せている今日、本論文を契機として、今後、同様の研究が世界各地で展開することが期待される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。